

## 賢劫十六尊の構成と表現

森 雅秀

### 一 はじめに

インドにはじまり、チベット、ネパール、あるいは中国、日本へと伝播していった密教の歴史の中で、もっとも重要なマンダラのひとつに金剛界マンダラがある。ヨーガ・タントラ以降、インドやチベットで流行したマンダラはそのほとんどが金剛界マンダラを雛型としたことや、日本においては胎藏界マンダラとひと組となり「両界マンダラ」とよばれたことは周知のとおりである。金剛界マンダラは大日如来を中尊とし、その周囲に四仏、十六大菩薩、諸供養菩薩を配し、三十七尊から構成されるが、これらの諸尊のまわりにさらに十六尊の菩薩が四尊ずつ四方におかれる場合がある。大乘仏教においてすでに信仰を集めていた弥勒や普賢などの菩薩を中心に構成されたこれら十六尊は、伝統的に「賢劫十六尊」とよばれてきた。

基本的に円と方形によって構成され、上下左右が対称的な形をとるマンダラは、中尊以外の尊格は複数の尊

格——その多くは四の倍数——からなるグループを構成している。そして周縁から中心にむかってマンダラ諸尊の位階ヒエラルキーの上昇を表現するため、中尊から等距離に位置する同一グループの尊格は同等の地位におかれている。マンダラの諸尊をいくつかの部族 (tribe) に分類するという密教特有の思想は、このようなヒエラルキーによって横わりにされたパンテオンを縦の方向で統合するためにあみ出された原理といえよう。密教の歴史では、仏部、蓮華部、金剛部の三つの部族から、仏部、金剛部、宝部、蓮華部、羯磨部の五部族へと展開する。マンダラはこのような部族の概念を反映した構造をとる。もつとも、部族の思想がはじめにあつて、それを表現するためにマンダラが生み出されたのではないであろう。むしろ、仏教的コスモロジーを前提としたマンダラを説明する原理として部族の思想が要請されたと考えた方が自然である。

金剛界マンダラはこのような部族の思想をはじめて徹底させたマンダラといわれ、三十七尊を構成する四仏や十六大菩薩たちは五つの部族に整然と統合されている。そのため、三十七尊のうち五仏を除く三十二尊の多くは、部族名をその名の一部に含んだり、金剛の語を冠した、いわば人工的につくりだされた尊格たちである。<sup>(1)</sup>三十七尊のまわりにおかれる賢劫十六尊は、各尊の名称からも五部の思想を体現したこれらの尊格とは性格も起源もことなることがうかがわれる。賢劫十六尊の内訳はつぎのとおりである。弥勒、不空見、滅惡趣、除憂闇、香象、勇猛、虚空藏、智幢、無量光、月光、賢護、網明、金剛藏、無尽慧、弁積、普賢。

賢劫十六尊の「賢劫」とは文字どおりには「吉祥なる時代」を意味し、人間の寿命が現在よりもはるかに長かった過去世を本来は指していたようであるが、<sup>(2)</sup>時代がくだると、諸仏があらわれ衆生を救済する現在の劫を示す語として広く用いられるようになった。現在の劫に成仏する菩薩の数は千に整えられ、その名称と由来などが『賢劫経』(大正藏 第四二五番)などに説かれている。これらの経典では弥勒が千仏の筆頭にあげられ、

またかれら千仏は無量光如来の子とみなされていることから、二・三世紀ごろよりインドから中国・中央アジアにかけて盛んになった弥勒信仰や阿弥陀仏信仰との結びつきが予想される。賢劫千仏信仰は、のちに、現在の劫ばかりではなく過去世、未来世にもそれぞれ千仏が顕現するという三千仏信仰へと拡大され、現在の賢劫に対して過去に莊嚴劫、未来に星宿劫という名称が登場するようになる（大正蔵 第四四六―八番参照）。

金剛界マンドラでは三十七尊の周囲の第二院に賢劫十六尊にかえてこの賢劫千仏を描いてもよいといわれる。後述するように、チベットや日本の金剛界マンドラの実際の作例にも、（一）賢劫十六尊を描いたもの、（二）賢劫千仏を描いたもの、（三）その両者を描いたものの三種類が存在する。そのため古来より賢劫十六尊は賢劫千仏の代表的な菩薩をまとめたものとしばしば理解されてきた。しかし、実際には賢劫十六尊のうちおよそ半数は賢劫千仏の中に含まれず<sup>3)</sup>、両者はことなる起源をもつと考えられる。『宝雲経』や『無量寿経』では、弥勒を上首とする賢劫千仏の他に賢護（Bhadrapala）らの十六尊を別にたてている<sup>4)</sup>。また、チベット仏教の伝承であるが、賢劫千仏を四方に二五〇尊ずつ配したマンドラの場合、各方向の上首は東方の弥勒以外はいずれも賢劫十六尊には含まれない威徳手（Sriputa）、智称（Jñānakīrti）、善愛日（Prīcandrayakṛta）の三尊<sup>5)</sup>である。ところで、賢劫十六尊のように大乘仏教の時代から信仰を集めた菩薩のグループとしては、八大菩薩が有名である<sup>6)</sup>。八大菩薩は経典によっていくつかの組み合わせがあることが知られ、その中には賢劫十六尊中の弥勒や普賢、虚空蔵（虚空蔵）などを含むものもあるが、八尊すべてが賢劫十六尊に一致するものはみあたらない。また八大菩薩の場合、金剛手と地藏はかならず含まれ、観音（観自在）もそのひとつに数えられることが多いが、この三尊はいずれも賢劫十六尊の構成員ではない。すなわち、賢劫十六尊は八大菩薩と共通の菩薩を含んではいるが、八大菩薩を増広して形成されたわけではないと考えられる。

金剛界マングラと直接、関係をもたず賢劫十六尊の構成員がすべて登場する文献として、無辺門(Anantamu-  
 び)の陀羅尼の功德を説いた『出生無辺門陀羅尼經』(大正藏 第一〇〇九番)があげられる。同經の冒頭には賢劫十六尊を含む二十二尊の菩薩名が列挙されている。しかも、興味深いことに、二十二尊中の十六尊の菩薩名は賢劫十六尊の配列にかなり近いものになっている。

賢劫十六尊は金剛界マングラ以外にも、このマングラの影響を強く受けて成立したとされる悪趣清淨マングラに登場する。また、賢劫十六尊と多くの尊格を共有する十六尊の菩薩のグループが「文殊金剛マングラ」と「法界語自在マングラ」にあらわれる。このふたつのマングラはヨーガ・タントラから無上ヨーガ・タントラへの過渡期に成立したと考えられ、いずれも文殊を中尊とするが、十六尊の菩薩は両者のあいだでも一致しない(表1)。

さて、金剛界マングラの賢劫十六尊は、従来より、構成する菩薩、配列、図像上の特徴などに種々の説があることが指摘されてきた。本稿では、異同があるとされる十六尊の配列の整理と図像上の特徴の確定をこころみる。これまでの研究は主として漢文資料を中心におこなわれ、対象も日本の金剛界に限定されてきた。そこで、ここではサンスクリットやチベット語の諸文献も参照する一方で、インドには現存しないマングラの図像例をチベットやネパールにもとめ、各地域の賢劫十六尊について、文献、作例の両面からのアプローチをおこなってみよう。

普 賢	弁 積	無 盡 慧	金 剛 藏	光 網	賢 護	月 光	無 量 光	智 幢	虚 空 藏	大 精 進	香 象	除 憂 闇	滅 惡 趣	不 空 見	弥 勒	金 剛 界
普 賢	弁 積	無 盡 慧	金 剛 藏	光 網	賢 護	月 光	甘 露 光	智 幢	虚 空 藏	大 精 進	香 象	除 憂 闇	滅 惡 趣	不 空 見	弥 勒	惡 趣 清 淨
除 蓋 障	虚 空 庫	無 量 光	月 光	光 網	除 憂 闇	滅 惡 趣	勢 至	弁 積	無 盡 慧	海 慧	賢 護	智 幢	香 象	文 殊	弥 勒	文 殊 金 剛
除 蓋 障	除 憂 闇	弁 積	無 量 光	光 網	月 光	勢 至	觀 自在	金 剛 藏	海 慧	宝 手	虚 空 庫	虚 空 藏	地 藏	無 盡 慧	普 賢	法 界 語 自 在

表1 『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』第19～22章所説の賢劫十六尊

## 二 金剛界マンダラの賢劫十六尊

## (一) インド

金剛界マンダラの典拠となる経典は、いうまでもなく『初会の金剛頂経』すなわち『*Tathasangraha*』である。実際にマンダラを表現する場合、他のいくつかの経典から図像的情報が利用されたといわれるが(石田、一九七五a)、賢劫十六尊に関しては該当する文献は見出せない。

『*眞実撰経*』中の賢劫十六尊に関する記述は、初品の金剛界品の第一章金剛界大マンダラと第二章金剛秘密マンダラに含まれる(堀内、一九八三・一一二、一二七)。これらはそれぞれわが国に伝わる九会の金剛界マンダラの成身会と三昧耶会に相当する。このうち、はじめの金剛界大マンダラでは、マンダラの製作規定をあつかう段落の末尾に三十七尊の記述につづけて、わずかに「外側の輪に大薩埵 (*mahasattva*) を安置せよ」と述べられるにすぎない。ここからは「大薩埵」の具体的な尊名や構成員、各尊の形態やシンボルなどを知ることができない。もう一方の金剛秘密マンダラでは「外側に適宜、弥勒などの各自の印 (*svachina*) を置け」と説かれる。弥勒は賢劫十六尊、賢劫千仏のいずれの場合も第一にあげられる菩薩であるため、この記述だけでは言及される諸尊が十六尊、千仏のいずれであるかは明らかではない。

『*眞実撰経*』の漢訳には梵本と同じ系統に属する不空訳(大正蔵 第八六五番)と施護訳(大正蔵 第八八二番)と、さらに梵本とは系統を別にし、より古い形態を示す金剛智訳(大正蔵 第八六六番)の三本が存在する。賢劫十六尊についてのこれらの記述に対応する箇所は、不空訳と施護訳では梵本に忠実な翻訳であるが、

金剛智訳の『金剛頂瑜伽中略出念誦経』（『略出経』）では「弥勒をはじめとする各自の印シヨボルを描くか、千菩薩を觀想せよ」と述べられる。<sup>8)</sup>梵本にもみられた「弥勒等の各自の印」の語は、金剛智訳では賢劫十六尊の各自の印を指し、賢劫十六尊それぞれを象徴するシンボルが存在していたことが予想される。さらに金剛智訳では、この少し後の段落に「十六大菩薩」の名のもとに弥勒、不空見以下の賢劫十六尊の菩薩名がすべて登場する（二四一頁上）。十六尊の順序はすでに述べたものに一致する。また、金剛智訳と同じ系統に属する不空訳の儀軌『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』（大正蔵 第八七四番）にも、同じ順序で十六尊の名称が列挙されている。<sup>9)</sup>

『真实撰経』の釈タントラといわれる『金剛頂タントラ』*Vajrasakharantatra*にも、三十七尊の外側に賢劫千仏と賢劫十六尊のいずれかを配置せよという記述がみられる。<sup>10)</sup>同経には「外側のマンダラのあらゆるところに賢劫の大薩埵を千尊配置せよ。（十六尊の）幟幟が何であるかを知るものは、弥勒以下の大薩埵全尊を配置せよ」とあり、内容的には金剛智訳の『略出経』に符合している。ただし、十六尊の具体的な尊名や各尊のシンボルについては依然として言及されない。

インドで著された『真实撰経』の註釈書のなかでもっとも重要なもののひとつ、アーナンダガルバ Anandagarbha の『タットヴァローカ』*Tattvaloka* は、賢劫十六尊あるいは賢劫千仏について、より明確に規定している。<sup>11)</sup>まず金剛界大マンダラの章への註で「弥勒などは東に位置し金剛薩埵と同じように金剛杵を持つ」と述べ、つづいて南、西、北の各方向では、それぞれ、金剛宝、金剛法、金剛業と同じように、順に宝、金剛蓮華、二重金剛杵を持つとする。十六大菩薩の各方向の上首である金剛薩埵、金剛宝等の四尊と同じように、四部のシンボルである金剛杵、宝、蓮華、二重金剛杵を持つのである。さらに、この直後に「賢劫尊に共通する

明呪」としてマントラをあげているが、「賢劫尊」が千仏と十六尊のいずれを指しているかははっきりしない。<sup>(12)</sup>

つづく金剛秘密マンドラへの註ではアーナンダガルバは賢劫千仏と賢劫十六尊の二説をあげる。まず、東西南北の四方にそれぞれ二五〇ずつの五鈷杵、金剛宝、金剛蓮華、二重金剛杵を描くように述べる。これは、金剛界大マンドラと同じ四部のシンボルであり、賢劫千仏を四分した各角の二五〇尊を象徴している。つぎに、弥勒、不空見、滅悪趣、除憂闇のシンボルとして東に金剛杵を四つ、同様に残りの十二尊の四尊ずつの名称があげられ、それぞれのシンボルがやはり宝、金剛蓮華、二重金剛杵であることが示されている。

アーナンダガルバには『タットヴァローカ』の他にも金剛界マンドラの儀軌である『サルヴァヴァジュローダヤ』*Sarvajrodzja*の著作がある。<sup>(13)</sup> 同書は後世、チベットでも権威ある儀軌としてあつかわれたが、三十七尊の外側については賢劫千仏の名称をすべてあげて千仏を描く説をまず示し、十六尊を描く場合は尊容は「恣意のまま」と述べるにとどまる。

金剛界マンドラの外院(第二院)に十六尊をおく説と賢劫千仏をおく説との二説があったことは、インド後期密教まで継承されたらしい。十一世紀から十二世紀にかけて活躍したアバヤーカラグプタ *Abhayakara-gupta* によるマンドラ観想の儀軌『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』*Nispānāyogavālī* には、当時流行していたと考えられる二十数種のマンドラ観想法が紹介され、金剛界マンドラもその中に含まれる。外院の尊格については、アバヤーカラはまず賢劫十六尊の尊名を列挙し、各角の四尊ずつが、順に阿閼、宝生、無量光、不空成就の四仏に似ると述べる(*Bhattacharya* 1972: 46)。アーナンダガルバの場合、十六尊は金剛薩埵などの四菩薩と同様であったが、『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』の説く金剛界四仏は右手に順に金剛杵、金剛宝、金剛蓮華、二重金剛杵を持ち、アーナンダガルバの説く四菩薩のシンボルに一致する。また、尊容も仏形



ではなく、衣裳、装身具も大目を除く三十二尊と同じ菩薩形をとり、具体的なイメージやシンボルはアーナンダガルバの説とかわりはない。

十六尊の記述につづけて、アバヤーカラは賢劫千仏を十六尊のかわりに観想する方法をあげている。ただし、各尊の名称は煩瑣をおそれて明記しないと述べ、賢劫千仏説があることを紹介するにとどめる。

アバヤーカラには『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』の姉妹作ともいうべきマンダラ儀軌書『ヴァジュラヴァリー』*Vajravali*がある。同書には実際の灌頂儀礼で用いられるマンダラの制作方法が説かれる。儀礼のためのこのマンダラは各尊のシンボルのみで構成され、三昧耶マンダラに相当する(森、一九九二)。金剛界マンダラの外院に関しては、弥勒、不空見以下の十六尊の名称と、そのシンボルとしてやはり四部のシンボルである金剛杵、宝、蓮華、二重金剛杵が四つずつあげられている<sup>15)</sup>。儀礼のためのマンダラの場合、賢劫千仏説は述べられていない。

以上みてきた、金剛界マンダラに関連するインドの諸文献中の賢劫十六尊(あるいは賢劫千仏)についての記述をまとめておこう。

根本タントラである『真実撰経』では「大薩埵」「弥勒等」というばくぜんとした表現であったが、梵本に先行する金剛智訳の『略出経』では、十六尊説と賢劫千仏説の二説あることが明記され、十六尊の名称もすべて登場する。ここにあらわれる十六尊の名称と配列は、この後の諸文献のあいだでも一貫している。また同経の記述からは弥勒等の十六尊が「各自の印」を持っていたことが予想されるが、それが何であったかは経典には明記されていない。類似の記述は『金剛頂タントラ』にも見出されるが、十六尊のシンボルの全容はここでも明らかにされていない。

アーナンダガルバの註釈書では賢劫千仏と十六尊の二説を併記したうえで、いずれの場合も四部のシンボルである金剛杵、宝、蓮華、二重金剛杵があげられている。千仏と十六尊とは、シンボルの数が一方角あたりで二五〇であるか四であるかのちがいはあっても、シンボル自体にちがいはない。アバヤーカラグプタの二著作においてもこれは同様である。ただし、十六尊の尊容としてアーナンダガルバが金剛薩埵等の四菩薩をあげるのに対して、アバヤーカラグプタは阿閼等の四仏と同じと説く。また、実際の儀礼のためのマンダラでは賢劫千仏はあらわれず、描かれるのは十六尊を象徴する四部のシンボルに限られる。

(二) チベット

文献でたどることのできるチベットの金剛界マンダラは、インドの伝統に忠実であったことが知られる。これは、前節で紹介したアーナンダガルバの『サルヴァヴァジュローダヤ』やアバヤーカラグプタの『ニシュパ  
ンナ・ヨーガーヴァリー』などの諸儀軌が、権威をもってチベット仏教にうけいれられたためであろう。

十二世紀の碩字プトンによる金剛界マンダラ儀軌（東北 五一〇五番）はアーナンダガルバの『サルヴァヴァ  
ジュローダヤ』に対する註釈の形式をとり、金剛界マンダラの第二院にはやはり賢劫千仏を配する。<sup>16</sup>十九世  
紀にジャムヤン・ロテルワンポ Jam dbyang blo gter dbang po らによって著されたマンダラ理論書『タント  
ラ部集成』 *Gyud sde kun btus* もアーナンダガルバとプトンの流れをくみ、賢劫十六尊への簡単な言及もある  
が、賢劫千仏を描くことを第一に記す。<sup>17</sup>『タントラ部集成』に説かれるマンダラは、ロテルワンポの属したサキ  
ヤ派のゴル寺において前世末に作成された。金剛界マンダラは、一三九種のマンダラからなるこのコレクシ  
ョンの第二二番目に位置し、そこでは賢劫千仏が各部族を象徴する青、黄、赤、緑にぬりわけられ、各部のシ

ンボルを手にした姿で描かれている (bSod nams rgya mtsho 1983)。

一方、アバヤーカラグプタの二著作にもとづいて著された文献では、賢劫十六尊は四仏と同じ姿をとるとい  
う『ニシュパナ・ヨーガーヴァリー』の記述をそのまま踏襲している。パンチェン・ラマ一世(十六―十七  
世紀)によるマンドラ成就法の手引書やチャンキャ・ラマ(十七世紀)による二著作への註釈書がこれに相当  
する。<sup>(18)</sup>

チベットの金剛界マンドラの作例はわが国においても比較的よく知られている。このうち、はやくから紹介  
されているものはラダック地方の仏教寺院の壁画である。たとえばアルチ寺の三層堂の二階には三十七尊から  
なる金剛界マンドラが描かれている。マンドラ自体には賢劫十六尊も賢劫千仏も描かれていないが、マンドラ  
の下方に一列が八尊で上下二列からなる賢劫十六尊の姿が確認できる(加藤・松長、一九八一・二〇―二一)。  
十六尊は四尊ずつ四部を象徴する身色をし、坐法を含めて尊容は十六大菩薩の上首四菩薩に似ている。また、  
同じアルチ寺の大日堂には三十七尊に十六尊を加えた五十三尊の金剛界マンドラがある。このマンドラは五仏  
以外のすべての尊が刀剣を持つという独特の特徴をそなえ、賢劫十六尊もその例外ではないが、身色はこのマ  
ンドラでも各方向ごとに部族を象徴する色がぬられている(加藤・松長、一九八一・四二)。さらに、チャチャ  
プリ寺の本堂には、賢劫十六尊を第二院に、賢劫千仏を第三院に配した金剛界マンドラがあることが知られて  
いる。ここでも賢劫十六尊と賢劫千仏は四部を象徴するシンボルを手にし、東から順に青、黄、赤、緑にぬり  
わけられている(岩宮、一九八七・七一)。

北京の擁和宮にある慈寧宮宝相楼にチベット仏教のプロンズ像コレクションがあることが欧米で紹介されて  
から半世紀以上経過するが、このうちの何セットかは『ニシュパナ・ヨーガーヴァリー』に準拠しているこ

とが近年明らかにされた(田中、一九八五)。金剛界マンダラの諸尊のブロンズ像もこの中に含まれ、同書の規定どおり、賢劫十六尊は阿閼等の四仏と同じ姿で表現されている。<sup>19)</sup>

このように、チベットの金剛界マンダラでは、インドで成立した諸文献の規定が忠実に継承され、実際の図像例においても、四部のシンボルと色彩に統一された賢劫十六尊あるいは賢劫千仏が登場する。

### (三) ネパール

インド後期密教の影響を直接受け、膨大なサンスクリット文献を受けついでネパール仏教では、金剛界マンダラに関する伝承も、インドで成立した儀軌類がそのまま利用されたと考えられる。たとえばカトマンドウ盆地を中心とするネワール仏教徒たちのあいだに残る『ニシュパンナ・ヨーガーヴァアリー』や『ヴァジュラーヴァリー』あるいは両文献と同一の内容を含む『アーチャーリヤ・クリヤーサムツチャヤ』*Ācāryāriyāsamuccaya*の写本数は、そのままこれらの文献のネワール仏教への浸透度を物語っている。<sup>20)</sup> アーナンドガルバの『サルヴァヴァジュローダヤ』もネパール系の写本で今日見ることが出来る。

ここでは、ネパールの密教僧クラダッタ *Kuladatta* によって著されたとされる金剛界系のマンダラ儀軌『所作集』*Kṛtyasamgraha* をとりあげて、ネパールにおける賢劫十六尊をおってみよう。<sup>21)</sup>

『所作集』の後半部に五十三尊からなる金剛界マンダラの尊名とシンボルを列挙した「(マンダラに) 彩色をほどこす儀軌」(*Rajapātanaividhi*)<sup>22)</sup>がある。この場合の五十三尊も、チベットの伝承と同様、金剛界の三十七尊に賢劫十六尊を加えたものである。ここに述べられている賢劫十六尊は、配列についてはインドやチベットの金剛界マンダラのそれに一致するが、シンボルは弥勒が龍華樹と水瓶、不空見が眼をのせた蓮華といったよう

普賢寶鬘	弁積蓮華寶	無盡慧甘露瓶	金剛藏青睡蓮	光網	賢護寶	月光蓮華月輪	甘露光甘露瓶	智幢	虚空蔵	大精進劍	香象の容器	除憂闍杖	滅惡趣鉤	不空見蓮華眼	彌勒龍華樹水瓶	尊名シンボル
------	-------	--------	--------	----	-----	--------	--------	----	-----	------	-------	------	------	--------	---------	--------

表2 『所作集』所説の賢劫十六尊とシンボル

に各尊が独自の幟幟を持ち、四菩薩や四仏と同じ四部のシンボルで表されたこれまでのものとは異なっている(表2)。

『所作集』があげる賢劫十六尊のシンボル体系と同じものは、金剛界マンダラの影響をうけたといわれる悪趣清浄マンダラに見出すことができる。悪趣清浄マンダラの典拠となる『悪趣清浄タントラ』には『九仏頂タントラ』と『清浄タントラ』の二系統があることが知られている。十数種存在する悪趣清浄系のマンダラの代表的な二種のマンダラである九仏頂マンダラと普明大日マンダラは、それぞれこれら二系統のタントラにもとづく。このうち、普明大日マンダラを説く『清浄タントラ』は八世紀ごろという比較的はやい時期に成立したとされるが、九仏頂マンダラの典拠である『九仏頂タントラ』の成立は十一、二世紀ごろにまでくだり、しかもインドではなくネパールで著されたとする説もある(乾、一九八八、一九八九)。実際、九仏頂タントラおよびそのマンダラはネパールでおおいに流行した。

賢劫十六尊は九仏頂マンダラ、普明マンダラの両者に含まれるが、『所作集』と同じシンボル体系を明記しているのは九仏頂マンダラの方である。<sup>(23)</sup>『サルヴァヴァアジュローダヤ』の著者であるアーナンダガルバは九仏頂マンダラの儀軌も著している(TTP, No. 3460)。この儀軌は『九仏頂タントラ』に先行し、また漢訳されていることがすでに指摘されているが(乾、一九八九)、賢劫十六尊が持つそれ

それ異なつたシンボルは、すでにこの儀軌に含まれる。<sup>(24)</sup>

九仏頂マンダラの賢劫十六尊のシンボル体系は諸文献のあいだで一貫している。アバヤーカーラグプタは九仏頂マンダラの観想法と製作方法を先述の二著作の中でそれぞれ記述し、このマンダラを「悪趣清浄マンダラ」とよんでいる。賢劫十六尊のシンボルはこれらの文献でも維持されている。<sup>(25)</sup> チベットの諸文献、たとえばパンチェン・ラマ一世やチャンキヤ・ラマの儀軌、あるいは『タントラ部集成』でもこれは同様である。<sup>(26)</sup>

『九仏頂タントラ』は『所作集』の成立にも関与したといわれている(乾、一九八八・一一三)。『所作集』の説く賢劫十六尊が『九仏頂タントラ』の賢劫十六尊と同じシンボル体系をもつことの背景に、『九仏頂タントラ』の影響があると考えられる。

『所作集』の賢劫十六尊が『九仏頂タントラ』に由来する根拠として、十六尊の第九番目の菩薩名があげられる。この尊名は九仏頂マンダラの諸文献では、「無量光」(Amītaprabhā; Tib. 'Od dpag med) と「甘露光」(Amṛtaprabhā; Tib. bDud tsi'i 'od) の二種類があらわれる。<sup>(27)</sup> とくに時代のくだる文献ほど甘露光である傾向が強い。金剛界マンダラの場合、この菩薩の尊名はすべて無量光であつて甘露光の例はなかった。『所作集』では金剛界マンダラを説きながら、この菩薩を無量光ではなく甘露光とよんでいる。ここからも『九仏頂タントラ』の説く賢劫十六尊のシンボル体系の『所作集』への流入をうかがうことができる。<sup>(28)</sup>

十六尊の各尊がそれぞれのシンボルを持物として持つ九仏頂マンダラの賢劫十六尊の作例はカトマンドゥウ市内でも見ることができる。カトマンドゥウ市北部タメル地区にある古寺ムシュヤ・バハ Mysya-baha には、ひびきをささえる「ほおづえ」に賢劫十六尊の彫刻がほどこされている。<sup>(29)</sup> ここでも、甘露瓶をシンボルとして持つ第九番目の菩薩には「甘露光」の銘文がきざまれている。

## (四) 日本

日本の金剛界マンドラに含まれる賢劫十六尊の配列と構成員に異説がいくつかあり、諸文献のあいだで一致をみないことはすでに古くより指摘されている。<sup>30)</sup>これは、たとえば高田修氏によって『高雄曼荼羅の研究』(一九六七・四三)の中でわかりやすい表の形でまとめられている。

ところで、日本の金剛界マンドラの研究資料は、近代の研究者による論考を別にしても、文献資料、画像資料の両者にわたり、膨大な数にのぼる。これらの資料を網羅的にすべてあつかうことはこの小論ではほとんど不可能である。そこで、ここでは大正蔵やその画像部などに収録されており、比較的参照が容易なものに限って、賢劫十六尊についてみていくことにしたい。その場合、まずはじめに十六尊の配列と構成メンバーについて、文献資料からと画像資料の中でも尊名が明記されているものから整理する。そして、これとは別に、各尊の持物や三昧耶形などのシンボルについて、これに言及する文献を参照しながら、画像資料を中心にまとめてみることにする。

賢劫十六尊の配列と構成員は、インドやチベットの金剛界マンドラでみられたものが第一にあげられる。これは悪趣清浄系のマンドラにもあらわれ、ネパールの文献でも一貫していたことはすでにみたとおりでである。ここでは以下この配列を便宜上「配列A」とよび、これを基準としてその他の配列を示していこう。

配列Aを示す文献は、すでにふれた金剛智訳の『略出経』と不空訳の『大教王経』の二点があげられる。またのちに慈覚大師円仁によって著された『大教王経』への註釈『金剛頂大教王経疏』(大正蔵 第二二二三番)には賢劫十六尊の各尊の名称とその由来が説かれているが、十六尊の順序は『大教王経』にほぼ一致している。<sup>31)</sup>

『略出經』と『大教王經』はともにインドより請来された文献であり、インドやチベットの伝承においても同じ配列がみられることより、配列Aはそれ以外の配列よりも古い形であると考えてよいであろう。

わが国の文献資料や図像資料で配列Aをとるものはほとんどない。そしてA以外の配列は一樣ではなく多岐にわたっている。しかし配列Aとそれ以外の配列とを比較してみると、つぎのような点を指摘することができる。

- (1) 配列の異同は同一方向に位置する四尊のあいだでのみおこり、他の方角の尊格といれかわることはない。
- (2) 東方の四菩薩と南方の四菩薩は配列Aとそれ以外とでほとんど異同はない。
- (3) 西方の四菩薩は両者の配列のあいだで異同があるが、構成する菩薩は同じである。
- (4) 北方の四菩薩は配列・構成員ともに両者のあいだで異同がある。

各項目について該当する文献などをあげながら説明しよう。

(1) については問題はないであろう。

(2) については若干の例外がある。東方の第三位の菩薩に配列Aでは滅悪趣がおかれたが、これにかわって除蓋障をあげるものがいくつもある<sup>32</sup>。また南方第三位の菩薩である虚空蔵のかわりに金剛幢あるいは如意幢があらわれる文献もある。これらはいずれも別の菩薩へのおきかえであるが、東方第三、第四の菩薩をいれかえた文献がある。すなわち『賢劫十六尊』（大正蔵 第八八一番）は除憂（||除憂闍）、除惡（||滅惡趣）の順をとる（三三九頁上）。また文秘の『秘藏記』は第三位に除無闍、第四位に無量慧をあげている（大正蔵図像部 第一卷 一五頁上）。

(3) の西方の四菩薩については、配列Aでは無量光、月光、賢護、光網であったのに対し、非配列Aでは無量



光、賢護、光網、月光の順となる。ただし、ここでも例外として『秘藏記』が賢護、無量光、月光、網明（光網）という順をあげる。

(4) についてはいささか複雑な様相を示している。配列Aでは北方の四尊は金剛藏、無尽慧、弁積、普賢の順序で並んでいた。配列Aをとらない場合、このうちの金剛藏と普賢はつねにあらわれるが、残る二尊には無尽慧と弁積の他に文殊と智積の名称があらわれる。かならず含まれる金剛藏と普賢のうち、普賢は第四位という定位置を動かないが、金剛藏は第三位にくる場合と第一位にくる場合のふたつのパターンが認められる。金剛藏の位置に応じてこれらを便宜上、配列B、配列Cとよぶことにしよう。

ここで北方の四菩薩についてA、B、Cの配列を示しておく。

A…金剛藏、無尽慧、弁積、普賢

B…x、y、金剛藏、普賢

C…金剛藏、x、y、普賢

(x、yには無尽慧、弁積、文殊、智積の中からいずれか二尊がえらばれる)

まず配列Bであるが、ここでx、yであらわした二菩薩には無尽慧以下の四菩薩が無秩序にあらわれるわけではなく、いくつかのパターンがある。文献によっては、ひとつの菩薩のところに二尊の菩薩名をあげ、そのいずれでもよいとするものがある。二尊の菩薩名の組みあわせは、無尽慧と智積、文殊と弁積のふた組がある。これらの二菩薩ずつは同じシンボルで表現され、互換性があると考えられたのであろう。実際にx、yに登場するパターンもこれにほぼしたがう、すなわち、無尽慧・弁積あるいは文殊・智積のような組み合わせがあっても、無尽慧・智積、文殊・弁積の二例はほとんどあらわれない。ただし、ここでも例外として『秘藏記』の

$x \parallel$ 智積、 $y \parallel$ 無尽慧、『金剛界大曼荼羅眞処別本』（大正蔵図像部第一巻 五六〇頁）の $x \parallel$ 文殊、 $y \parallel$ 弁積があるが一般的ではない。そして、無尽慧あるいは智積をはじめにおき、あとに残りの二尊のうちの一尊がえらばれる例（ $B_1$ ）と、逆に文殊と弁積のいずれかがはじめにおかれ、他の菩薩がうしろにおかれる場合（ $B_2$ ）に分類することができる。具体的な組み合わせとしては、 $B_1$ に無尽慧・弁積（『賢劫十六尊』、淳祐『金剛界七集』、興然『金剛界七集』）、無尽慧・文殊（淳祐『金剛界七集』、叡山本八十一尊曼荼羅）、 $B_2$ として文殊・無尽慧（『二十七尊賢劫十六尊外金剛二十天図像』、『金剛界三昧耶曼荼羅図』）、文殊・智積（『金界発慮鈔』、『両部曼荼羅義記』）、弁積・無尽慧（明達『両界図位』）<sup>35</sup>があげられる。組み合わせとしては可能であるが弁積・智積のパターンはなく、また智積がはじめにおかれる例も『秘蔵記』をのぞいて見当たらない。

配列Bにくらべて配列Cは単純である。 $x$ 、 $y$ のところには文殊と智積がこの順序であらわれるのみである<sup>36</sup>。この文殊と智積という尊名はすでにみたように配列Aにはあらわれず、配列Bになつてはじめて登場した二菩薩である。また、配列Cの金剛蔵が第一位におかれている点は配列Aと同じであるが、さきほどの互換性から考えれば弁積（ $\parallel$ 文殊）、無尽慧（ $\parallel$ 智積）の順となり、配列Aの無尽慧、弁積とは逆になっている。配列Cの場合、西方四菩薩の順序が配列Aではなく配列Bと共通であったことや、文殊・智積の組み合わせが配列Bの中でも比較的新しい文献にみられることから、配列Bの文殊、智積、金剛蔵という $B_2$ の組み合わせを配列Aにあわせて金剛蔵、文殊、智積としたものではないであろうか。

A、 $B_1$ 、 $B_2$ 、Cの各配列をまとめたものが表3である。

賢劫十六尊の配列と構成員に三ないし四系統あることをふまえて、日本の金剛界マンダラにおける十六尊のシンボル体系をみていこう。

普   賢	弁積	無 盡 慧	金 剛 藏	光 網	賢 護	月 光	無 智 虛 大 香 除 滅 不 彌	量 空 精 憂 惡 空 闇 趣 見 勒	A
	金 剛 藏	文殊 殊積	無 盡 慧	月 光 賢 光 網 護	量 空 精 憂 惡 空 闇 趣 見 勒	量 空 精 憂 惡 空 闇 趣 見 勒			B <sub>1</sub>
		智 積							無 盡 慧
	智 積	文 殊	金 剛 藏						C

表3 賢劫十六尊の配列

インド以来の配列Aを示す『略出経』や『大教王経』には各尊の個々のシンボルについての言及は含まれない。これらについて述べる文献があらわれるのは、時代がくだってからである。賢劫十六尊のより古いシンボル体系を伝えるのは、文献資料よりもむしろ図像資料であると考えられる。

空海が中国より請来した金剛界マンドラの原本は現存しないが、これをもとに何回かにわたって転写されたいわゆる現図系の九会の金剛界マンドラが伝えられる<sup>37)</sup>。また、現存する最古の両界曼荼羅といわれる紫綾金銀泥絵の「高雄曼荼羅」も参照することができる。高雄曼荼羅からはマンドラの尊像のみをとりだした白描集も製作された。さらに、現図系ではないが、永く伝真言院曼荼羅とよばれた小幅本の金剛界マンドラや、十二世紀ごろの製作といわれる金剛界マンドラの残闕（いわゆる乙本）、さらには投華得仏の儀式に実際に使用されたとみられる敷曼荼羅が残されている<sup>38)</sup>。

これらは、最後の敷曼荼羅を除き、いずれも九会からなる金剛界マンドラである。九会マンドラの場合、中央の成身会には賢劫千仏がおかれ、三昧耶会、微細会、供養会、降三世会、降三世三昧耶会の五会には賢劫十六尊が描かれている。敷曼荼羅は成身会に相当するが、賢

劫千仏ではなく賢劫十六尊が描かれる。これらの図像資料の賢劫十六尊のシンボルを比較してみると、同一マングラの五会のあいだばかりではなく、ことなるマングラのあいだでも、シンボル体系はほとんどかわりがないことが知られる。シンボルの名称と配列はつぎのとおりである。<sup>39)</sup>

(東) 水瓶、独鈷眼、梵経、樹枝

(南) 鉢、劍、宝、幢

(西) 光焰、賢瓶、光網、半月

(北) 梵経、五色雲、井字金剛杵(独鈷杵を井桁に組む)、劍

これらのシンボルは白描の九会マングラや卷子本の白描集においても同じ配列で描かれている。<sup>40)</sup>

文献にみられるシンボル体系はどうなっているであろうか。円仁や円珍の師であった青龍寺の法全に由来すると推測される(梅尾 一九二七・二四七)『賢劫十六尊』は尊名とシンボル名をあげる数少ない文献資料である。同書の示すシンボルは現図のものと比べると一部で一致しないものがあるが、多くは共通している。<sup>41)</sup>また石山流の開祖として東密の伝統に大きな影響をあたえた淳祐(八九〇―九五三)の『金剛界七集』は、図像資料にみられたシンボルをほぼそのままの順序であげている。ただし、東方第三、第四、北方第一、第二のシンボルをそれぞれ逆にする(大正蔵 図像部 第一巻 一九六一―八頁)。

このように、文献資料においては若干の例外は認められるものの、図像資料においては十六尊のシンボル体系はきわめて安定していたことがうかがわれる。<sup>42)</sup>これは、十六尊の尊名や配列でみられた混乱とは対照的である。そして、シンボル体系の安定性は、これらの混乱がシンボルの異同にもとづくものではないことを示唆している。むしろ、尊名や配列の混乱、とくに北方の四菩薩に関するそれは、シンボルと特定の尊格との対応関

係が、普賢を除いてあいまいであったことに起因すると考えられる。

日本の金剛界マングラにみられるシンボル体系は、すでにみた十六尊の配列のいずれの系統に一致するであろうか。配列Aと配列B・Cとのちがいは、西の四菩薩の順序にあった。これら四尊のシンボルの順序をみると、光焰、賢瓶、光網、半月であり、配列B・Cの無量光、賢護、網明、月光と正確に対応している。また配列Cが配列Bをもとにした比較的新しい配列であったことを考慮すれば、中国からの請来本を原本とするこれらの図像資料はCではなくBの配列を示していると考えるべきであろう。<sup>(43)</sup>

### 三 おわりに

これまで述べてきたことより、インド密教とその後継者であるチベット密教の流れと、中国を経由して日本に伝えられた密教の流れとのあいだでは、金剛界マングラの第二院に配される賢劫十六尊に大きな断絶があることが明らかとなった。

アーナンダガルバ以降のインドやチベットの金剛界マングラでは、賢劫十六尊は四つの部族のシンボルである金剛杵、宝、蓮華、二重金剛杵を手にし、四部を象徴する色でぬりわけられるという、部族の思想を文字どおり体現した姿であらわされた。部族という理念を徹底させることよって、十六尊のそれぞれの菩薩が個性を捨てた単純な姿をとることになったのである。これは、顕教の菩薩が密教の菩薩へと変化するひとつのパターンであると言いうこともできる。

しかしながら、根本タントラである『真実撰経』が成立した当初の賢劫十六尊は、依然として顕教の菩薩としての側面をたもち、各尊がそれぞれを象徴するシンボルと結びついていたことは、経典中の「各自の印<sup>シンボル</sup>」と

という言葉から推測される。ただし、日本の金剛界マンダラの賢劫十六尊がそなえていたようなシンボル体系は、インドの文献の中には見出すことはできなかった。

インドやネパールでは『悪趣清浄タントラ』の九仏頂マンダラに、独自のシンボルで象徴される賢劫十六尊があらわれる。九仏頂マンダラの十六尊のシンボル体系を日本の金剛界マンダラのそれと比較してみると、かなりの菩薩で一致していることがわかる。このふたつの体系は、本来は同じものであったとはいえないまでも、よく似たシンボル体系を出発点とした可能性もあるであろう。<sup>44</sup>ネパールの金剛界マンダラに九仏頂マンダラの十六尊のシンボル体系が登場したことは、単なる借用ではなく、類似のシンボル体系への一種の回帰とみなしうるかもしれない。

十六尊の各尊が独自のシンボルを持つことを説く文献がインドには見出せないことと同様、アーナンダガルバが説くような四部のシンボルをそなえた賢劫十六尊は日本の金剛界マンダラにはあらわれない。現図曼荼羅に代表される日本の金剛界マンダラが成立した時代には、四部あるいは五部の概念は十分浸透していなかったためであろうか。その後、日本の金剛界マンダラは、部族という理念よりも大・三・法・羯の四印によって解されるのが一般的であった。

従来よりいわれてきた賢劫十六尊の配列および構成員の異同は、日本の金剛界マンダラにしかあらわれず、インドまではさかのぼりえなかつた。インド、チベット、ネパールでは、十六尊の名称と配列は一貫していたことが明らかとなった。十六尊の配列のちがいは、大きくAと非Aのふたつにわかれ、このうちA以外の配列はさらにB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、Cの三つに分類することができた。AとA以外とは西方と北方の八菩薩の配列に大きなちがいがあがるが、A以外の配列を示す三系統は、どのシンボルをどの菩薩のものとみなすかというちがいにすぎ

ず、シンボル自体は尊名比定の混乱とは対照的にきわめて安定している。とくに北方の菩薩にみられる配列や尊名の混乱は、シンボルとそれによって象徴される菩薩との結びつきの弱さも一因となっていると考えられる。たとえば、配列Aでは登場することのなかった文殊が配列BやCで登場するようになったのは、梵経というシンボルとの結びつきが、他の無尽慧や弁積よりも強かったからであろう。

インド・チベットの賢劫十六尊と日本のそれとの相違は、密教図像の伝統を継承する両地域の姿勢にも関連している。整備された儀軌が存在し、作品よりも文献に優越性を与える反面、儀礼のために作ったマンダラは、儀礼が終了すればただちに破壊されるというインド・チベットの密教図像の伝統とはことなり、このような優越性をもった文献が存在せず、逆に請来本や現図などに代表される図像資料を重視したことが、日本における賢劫十六尊の混乱をまねいたもつとも大きな要因ではなかったであろうか。

## 略号

大正蔵 II 大正新脩大藏経

〔1〕 II 大谷大学図書館所蔵『影印北京版西蔵大藏経』鈴木学術財団。

## 注

- (1) ただし三十二尊の多くは従来から信仰されてきた尊格を起源としていることが田中公明氏によって指摘されている(一九八一、一九八三)。
- (2) 『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵 第一四四二番 六七〇頁下。Cowell & Neil 1970: 344.
- (3) 『賢劫千仏名経』(大正蔵 第四四七番)があげる千仏の中で賢劫十六尊にも登場する尊格は、弥勒、不虛見(不空見)、香象、無量光、月光、樂説聚(弁積)の六尊にすぎない(括弧内は賢劫十六尊の尊名)。千仏のサンسكريットおよび漢訳名は Weller

(1928)を参照した。

- (4) 大正蔵 第六五八番 二〇九頁中、同第三六〇番 二六五頁下。
- (5) サキヤ派のゴル寺のマンドラ・コレクション (Sod nam rgya ntsho 1983: Nos 22-24) による。これらの四尊の名称はWeller (1928)の千仏のリストでも、弥勒は五番、威徳手は二五七番、智称は五一〇番、善愛目は七五六番と、ほぼ二五〇の間隔をおいて登場する。
- (6) 八大菩薩については頼富本宏氏による詳しい論考がある(一九八三、一九八六等)。
- (7) テキストは以下のとおり  
不空見菩薩。文殊師利童真菩薩。滅惡趣菩薩。斷愛闇菩薩。除一切蓋障菩薩。網光菩薩。滅一切境界慧菩薩。觀自在菩薩。不疲倦意菩薩。香象菩薩。勇猛菩薩。虛空庫菩薩。無量光菩薩。月光菩薩。智幢菩薩。賢護菩薩。海慧菩薩。無尽慧菩薩。金剛藏菩薩。虛空藏菩薩。普賢菩薩。弁積菩薩。慈氏菩薩。(大正蔵 六七六頁七)。
- (8) 不空訳は大正蔵 第十八卷 二一七頁上、施護訳は同三七五頁下、三六一頁上、金剛智訳は同二四〇頁下。
- (9) 『大教王経』と同本異訳である不空訳『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』(大正蔵 第八七三番)には該当する部分はない。
- (10) TTP, No. 113, vol. 5, 29. 5. 1-3.
- (11) TTP, No. 3333, vol. 71, 186. 3. 4-6; 214. 4. 6-5. 2.
- (12) 梅尾祥雲氏も類似の解釈を示している(一九二七:二七四一五)。
- (13) サンスクリット・テキストは密教聖典研究会(一九八六―七)および森口光俊氏(一九八九)によって発表されている。
- (14) 賢劫千仏の該当箇所は森口氏の部分に対応する。
- (15) ただし坐法については、四仏の場合、結跏趺坐であったが、他の菩薩や女尊たちは薩埵趺坐(sattvaparyanka)をとると云ちがちなある(Bhattacharyya 1972: 46)。
- (16) TTP, No. 3961, vol. 80, 102. 5. 6-103. 1. 2.
- (17) Lokesh Chandra (1968, part 11: 683, 6-700. 4)
- (18) 'Jam dbyang blo gter dbang po (1971, vol. 4: 75. 5-76. 6).
- (19) Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mshan (1973: 85. 2-5); TTP, No. 6236, vol. 163, 11. 2. 1-5.
- (20) この他にもG. Tucciの*Tibetan Painted Scrolls* (1986)所収の金剛界マントラ(P. 219)が、賢劫十六尊を含む五十三尊マンドラであることが田中公明氏によって指摘されているが(一九八七:一六三)スライドからは細部の表現は判別できず



色彩も明らかではない。また『ニシュパンナ・ヨーガーヴァリー』のマンダラは、チベット人画工による白描が Rāghu Vira と Lokesh Chandra によって刊行されているが(1967)、あやまって「賢劫十六尊が大日と四波羅蜜のまわりに配され、四仏と十六大菩薩の四つの月輪がこれを取り囲む都部マンダラのような形に描かれている。

- (20) 各文献の写本の現存状況は塚本啓祥氏らの編になる『梵語仏典の諸文献』(一九八九)の各項参照。
- (21) 『所作集』(1987)は乾(一九八八)「桜井(一九八八)参照。
- (22) TTP, No. 3354, vol. 74, 44, 1-2-5-8.
- (23) Skorupski (1983: 29-31, 166-168) 普明マンダラの賢劫十六尊は経典では名称「シンボルとも明確ではない。またアーナンダガルバやヴィシュヴァマルナン Visravaman の儀軌 (TTP, No. 3458, vol. 77, 307, 4, 6-5-1; No. 3453, vol. 76, 124, 4-6) では「尊名のみが列挙されるが、その配列はこれまでみてきたものとも一致しない (Skorupski 1983: 312)。プトンは普明マンダラの儀軌(東北 五三四番)の中で、金剛界マンダラと同じ配列でしかも尊容も四菩薩と同じ賢劫十六尊を紹介する (Lokesh Chandra 1968: 705, 6-707.1)。これはラマック(岩宮 一九八七: 四二)やチベット本土の作例(梅尾 一九八六: 四三〇-二、bSod nams rgya mtsho 1983: No. 27)とも一致する。
- (24) TTP, No. 3960, vol. 77, 8, 3-2-5-8, 大正蔵 第一九卷 九〇頁上中。
- (25) Bhattacharyya (1972: 66-67); TTP, No. 3961, vol. 80, 104, 5, 5-7.
- (26) Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan (1973: 113, 1-114. 1); TTP, No. 6236, vol. 163, 12, 1, 5-2-5; 'Jam dbyang blo gter dbang po (1971, vol. 6: 353, 6-355, 2; 371, 1-372, 4).
- (27) 『九仏頂タントラ』のサンスクリット・テキストは甘露光・チベット訳では無量光、アーナンダガルバの儀軌ではチベット訳が無量光、漢訳が甘露光、アバヤカラグプタの二著作は梵蔵いずれも甘露光、『タントラ部集成』は無量光、パンチェン・ラマ一世、チャンキヤ・ラマの註釈は甘露光である。
- (28) 金剛界マンダラの賢劫十六尊に九仏頂マンダラのそれをあてる例は、たとえば立川武蔵氏の紹介する現代のネワール仏教の画工による金剛界マンダラにおいてもみられる(一九八七: 一六三)。
- (29) ムシュヤ・パンにつづいては Lock (1985: 271) 参照。
- (30) たとえば本圖『両部曼荼羅義記』大日本仏教全書 第五二巻 二〇八頁中—二〇九頁中。また『密教大辞典』『密教辞典』(いずれも法蔵館刊)の「賢劫十六尊」の項参照。
- (31) 除憂閣と香象の順序が逆になっている(大正蔵 第六一巻 三二頁上)。

- (32) 淳祐『金剛界七集』(大正藏圖像部 第一卷 一九六頁下)、『金剛界三昧耶曼荼羅圖』(同一〇六九頁)、『三十七尊賢劫十六外金剛二十天圖像』(同一〇八八頁)など。
- (33) 金剛幢は淳祐『金剛界七集』(一九七頁中)、『金界発惠鈔』(大正藏 第二五三三番 一三二頁中)などに、如意幢は『兩部曼荼羅義記』(二〇八頁下)にそれぞれ登場する。
- (34) 淳祐『金剛界七集』(一九八頁上)、明達『兩界圖位』(大正藏圖像部 第二卷 八五〇頁)、亮憲『金剛界曼荼羅尊位現圖抄私』(同一三三五頁)など。
- (35) 各出典の該当箇所は注(32)―(34)参照。
- (36) 『金界発惠鈔』(二三二頁中)、『金剛界大曼荼羅圖』(大正藏圖像部 第一卷 四八二、四九〇頁)、澄隣『兩部曼荼羅私抄』(同第二卷 一〇二四―七頁)、亮憲『金剛界曼荼羅尊位現圖抄私』(同一三三四―五頁)。
- (37) 現図よりも古い形式を伝えるとされる『五部心観』や青蓮院旧藏『金剛界諸尊図様』(柳沢 一九六五)には賢劫十六尊は含まれない。空海は八十一尊の金剛界曼荼羅を請来したと伝えられるが、この流れをくむ遺品は現存しない(小野、一九三七、小久保、一九八六)。
- (38) このほか台密系のマンダラとして八十一尊からなる一会の金剛界マンダラが伝えられ、十点程の作例がのこされている。台密の八十一尊マンダラについてはすでにいくつかの研究があり、大きく分けて二系統あることが知られている(田中、一九四八、錦織、一九七五)。賢劫十六尊については、賢劫十六尊のみを描くものと千仏もあわせて描くものの二種がこの二系統に対応する。しかし、十六尊の持物を比較すると、妙法院版(大正藏圖像部 第一卷 別紙三)が現図曼荼羅と同じ持物をもつのに対し、根津本や観山本(大正藏圖像部 第二卷 七〇六―七二頁)では戟や剣などまったく別の持物があらわれる。八十一尊曼荼羅の賢劫十六尊については稿を改めて検討したい。
- (39) 梅尾(一九二七・二七五―六)、石田(一九七九・二三二)にもあげられている。
- (40) いわゆる御室版や石山寺藏『金剛界大曼荼羅圖』(大正藏圖像部 第一卷 四八二頁)、『三昧耶形法輪院本』(同一二一九頁)、『金剛界三昧耶曼荼羅圖』(同一〇六四―九頁)など。
- (41) 除惡の三股杵、無量光の蓮華、金剛蔵の独股、普賢の五智院は一致しない。
- (42) たとえば、不空見のシンボルである独眼(独鈷の左右に眼をおく)が十字杵になるといった程度の変化はある。
- (43) 近現代の研究者による現図曼荼羅を中心とする比定作業でも、北方の四菩薩は無尽慧、弁積、金剛蔵、普賢の配列をとるものがほとんどである。例外として、石田尚豊氏が無尽慧と弁積を逆に(一九七五a)、また高田修氏が文殊、無尽慧としてい

る(一九六七)。「このうち、石田氏はのちに『西界曼荼羅の智慧』(一九七九)において弁積と無尽變を逆転させている。また高田氏は文殊、無尽變の順は淳祐の『金剛界七集』の持物との対応に一致させたとしている。なお石田氏は現図の胎藏界の不見見、一切憂冥は金剛界マンダラの不見見、除憂闇から補ったとされるが(一九七五a:110)、『もしこれが正しいとすれば現図胎藏界の成立時には、金剛界の賢劫十六尊のシンボル体系はすでに成立していたことになる。』

(44) 賢劫十六尊とよく似たグループを含む文殊金剛マンダラや法界語自在マンダラも、諸菩薩のシンボル体系に関しては共通の基礎をもっていたのではないであらうか。

#### 参考文献

- BHATTACHARYYA, B. 1972 (1949), *Nispannasyogitvat of Mahāpanīta Abhyākaraṅgupta*. G.O.S. No. 109. Baroda : Oriental Institute.
- COWELL, E. B. & R. A. NEIL 1970 (1886), *The Divyāvadāna : A Collection of Early Buddhist Legends*. Amsterdam : Oriental Press NY.
- 濱田 隆 1983, 『西界曼荼羅』『密教美術大観 第一巻』朝日新聞社。
- 堀内寛仁 1983, 『初会金剛頂経の研究(上)』高野山密教文化研究所。
- 乾 仁法 1988, 『Kriyasamgraha とおひそ本尊瑜伽』『密教文化』163: 97-116。
- 1989, 『仏説大乘観想曼荼羅淨趣経(二)』『印度学仏教学研究』37(2): 191-196。
- 石田尚豊 1975a, 『曼荼羅の研究』東京美術。
- 1975b, 『現図曼荼羅再考』『仏教美術』78: 18-33。
- 1979, 『西界曼荼羅の智慧』東京美術。
- 岩宮武二(写真)・石黒 淳・頼富本宏(解説) 1987, 『ニヤッタシ曼荼羅』岩波書店。
- JAM DBYANG BLO GTER DBANG PO. 1971, *Gyud sde kun btus*. Delhi: N. Lungtok & N. Gyaltsan.
- 小久保啓一 1986, 『東密の八十二尊曼荼羅』『大和文華』75: 1-16。
- 加藤 敏・松長有慶 1981, 『ペンタム』毎日新聞社。
- LOCK, John K. 1985, *Buddhist Monasteries of Nepal*. Kathmandu: Sahayogi Press.
- LOKESH CHANDRA (ed.) 1968, *The Collected Works of Bṛhaspati*, Part II. New Delhi: International Academy of Indian

- Culture.
- 密教聖典研究会 1986, 『Vajradhātumahāmandalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(I)』『大正大学総合仏教研究所年報』8: 24-57.
- 1987, 『Vajradhātumahāmandalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(II)完』『大正大学総合仏教研究所年報』9: 13-85.
- 森 雅秀 1992, 「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』57: 73-90.
- 森口光俊 1989, 『Vajradhātumahāmandalopāyika Sarvavajrodaya 梵文テキスト補欠—新出写本・蔵・梵・漢対照: 賢劫千仏名を中心として』『智山学報』38: 1-37.
- 錦織亮介 1975, 「求菩提山如法寺旧蔵阿毘曇茶羅圖—金剛界八十一尊図の一作例—」『西南地域史研究』4: 113-160.
- 小野玄妙 1937, 「弘法大師請来の金剛界八十一尊曼荼羅について」『密教研究』62: 1-10.
- PAN CHEN BLO BZANG CHOS KYI RGYAL MTSHAN 1973, rDo rje phreng ba'i dkyil 'khor chen po bzhi bcu rtsa gnyis ky'i sgrub thab, Rin chen dbang gi rgyal poi phreng ba, *Pan chen blo bzang chos ky'i rgyal mtsan gsun 'bum*, vol. 2. New Delhi (hand-written copy from prints of the Tashihunpo blocks).
- RAGHU VIRI & LOKESH CHANDRA 1967, *A New Tibeto-Mongol Pantheon*. Satapitaka Series, Indo-Asian Literatures vol. 21 (12) New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 桜井茶智 1988, 「Kriyāsamgrahaṇāṇikāの灌頂論(一)—瓶灌頂の梵文校訂テキスト及び考察—」『智山学報』37: 13-46.
- SKORUPSKI, T. 1983, *The Sarvadurgatiparisodhana Tantra: Elimination of All Evil Destinies*. Delhi: Motilal Banar-sidass.
- BSOD NAMS RGYA MTSHO 1983, *The Tibetan Mandalas, the Ngor Collection*. Tokyo: Kodansha.
- 立川武蔵 1987, 『曼荼羅の神々』ありな書房。
- 高田 修 秋山光和、柳沢 幸 1967, 『高雄曼荼羅』吉川弘文館。
- 田中一松 1948, 「金剛界八十一尊大曼荼羅の一考察」『国華』674: 117-123.
- 田中公明 1981, 「金剛界曼荼羅の成立について(一)」『印度学仏教学研究』30(1): 134-135.
- 1983, 「金剛界マンダラの成立について(二)」『印度学仏教学研究』31(2): 130-131.
- 1985, 「慈寧宮聖相様のフロンズ像立体曼荼羅セットの解析」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』7: 43-63.

- 1987, 『曼荼羅イコノロジー』平河出版社。
- 梅尾祥雲 1927, 『曼荼羅乃研究』高野山大学出版部。
- 梅尾祥瑞 1986, 『チベット・ネパールの仏教絵画』臨川書店。
- 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文 1989, 『梵語仏典の研究 IV 密教経典篇』平楽寺書店。
- TUCCI, G. 1980 (1949), *Tibetan Painted Scrolls*. Kyoto: Rinsen.
- WELLER, F. 1928, *Tausend Buddhanamen des Bhadrakalpa nach einer funfsprachigen polyglotte*. Leipzig: Verlag der Asia Major.
- 柳沢 孝 1965, 『青蓮院伝来の白描金剛界曼荼羅諸尊図様(上)』『美術研究』241: 20-42。
- 1965, 『青蓮院伝来の白描金剛界曼荼羅諸尊図様(下)』『美術研究』242: 13-20。
- 頼富本宏 1983, 『インドの八大菩薩像について』『中川善教先生頌徳記念論集 仏教と文化』同朋社出版, pp. 569-588。
- 1986, 『チベットの八大菩薩像』『ヒマラヤ仏教王国 2 密教曼荼羅界』三省堂, pp. 206-211。

後記

本稿脱稿後、田中公明氏による西チベットの仏教寺院の調査報告が公表された(西チベット・トリン寺とツァバラン遺跡の金剛界諸尊壁画について)『密教図像』第十一号、一九九二、一一—一二頁)。田中氏によれば、西チベットのグゲ地方の金剛界マナダラには賢劫十六尊がそれぞれ独自の尊容をとったものがあるという。そして、このような作例はアバヤーカーラグプタやアーナダガルバの影響が強かった中央チベットでは稀であると述べておられる。本稿ではチベットを一括してあつかったが、金剛界マナダラについては少なくとも中央チベットとそれ以外の地域とに分けて考察する必要があるようだ。

(高野山大学講師)